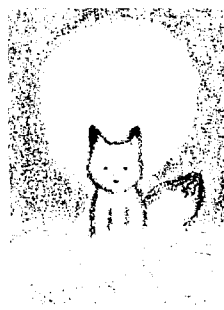


遊びのききめ



前回幼児期の遊びの心について考えました。子どもがうまく遊べるようになる為には、いろいろな

遊びの段階をとって団体で遊べるようにしたいとしました。(イ)なにもしていない。(ロ)ほかの子の遊びを見ている。(ハ)一人で遊ぶ。(ニ)平行遊び。(ホ)連合遊び。(ヘ)関係遊び。としました。年令の増加するにしたがって(ホ) (ヘ)が多くなり団体で遊べるようにすることが望ましいのです。四歳位で団体で遊べるようになればよいのです。この遊びの発達によっていろいろと力がついてきますが、その中で運動能力の発達とことばの発達について考えます。

今月のかひんごー

十一月の花「ガズミ」



ヨソズ他に各地方で、いろいろな名でよばれています。ヨツドメ、ヨウゾメ、ヨソゾメ等があります。これらから、この植物が、染めものに何か関係していたらしいことを思わせます。この仲間のミヤマガズミの果実で衣料をすりぞめにしたともいわれますが、はっきりはしていません。然し古くから、人々に親しまれてきた植物であることは、まちがいありません。冬にむかっ

都留文科大学教授

森江 晃三

運動能力は幼児の始めはあまり発達していません。大まかな全身運動しかできなかった子が、遊ぶことによって細かい運動ができるようになります。これも練習がないと発達しないのです。練習は同年令位の子と遊ぶことによってできるのです。

もう一つは、子どもと遊ぶことによって言語活動が広がることです。幼稚園、保育園に入ると言葉が多くなるのもこの為です。家以外の場所と言葉を覚えるようにしたいものです。

最初、家以外の場所で話をしようとする時、幼児同士では通用しない時があるのです。それは、家の中で家族間では通用しても、他人の幼児とは通用しないということです。こんな時、失敗にひるまないで意志を通じさせる子と、すぐにめげてしまう子があります。すぐめげてしまう子は、大人に助けをもとめたりします。この辺りに遊ぶ子と、遊ばない子のちがいがでてくるのです。

本当に相手にわかるような話ができるようになるには、相手の反応を考えながら話せるようになることです。こうなると遊びの十分

教育相談室 (43) 1111

内線 214

見直される反逆説

英傑信玄を失った後の武田は勝頼が継ぎました。しかし、武田の勢力は天正三年(一五七五年)の長篠の戦いを境に凋落の一途をたどり、新しく台頭してきた信長・家康軍によって、天正一〇年(一五八二年)遂に現在の和村田野で亡びたのでした。

この時、信茂は勝頼に岩殿城籠城を進言しながら受け入れず、武田の滅亡を早めたとされ、長い間武田ファンから逆臣の汚名を受けています。

しかし、最近の歴史の解釈はだいぶ変わってきて、小山田氏の評価も大きく変わってきています。

即ち、

●もともと血脈を異にする平氏であったこと。

●武田氏としばしば通婚関係があることから明らかになように同格であって、守護としての地位を持っていたこと。

●弱肉強食の戦国の世を迎え、越中守信有のとき、武田と争い、結果として臣下の礼を執るようになったが、その後も郡内領主の地位を維持していたこと。

●下剋上という、親を追放し子を殺しても強い者勝ちという特殊な時代を考慮しなければならぬこと。

小山田シリーズ

なごととして、武人として家系を絶やさないこと、領主として自国の領土の保全をはからなければならぬことがあげられます。最後に逆いたということを責められていますが、最初に離反した木曾義昌は責められないこと。織田軍の甲州攻めでは、伊奈高遠城の戦いがあるだけで、無戦状態で武田軍は瓦解し、親族重臣ことごとく逃亡するなかで、郡内侵攻に至る直前まで盟主としての立場を守ったことは、むしろ高く評価できると主張する方もあります。

小山田氏は三代に亘って武田と結び、協力してきましたが、領地を増やされるとか、攻略した城を与えられるということはなく、他の部将の不満を押える見本のような形をとられ、かえって富士道者から得られる莫大な関銭収入を武田に吸い上げられ、撰銭としては鉄砲玉の資源を供給したりして、郡内領保全のために献身的に尽力したものと思われる。

こうした経緯や立場、そして数々の軍功が理解されるようになって、信茂の行った行動は正しかったと解されるようになりました。禄を武田からもらっている家臣の立場と同列視することはできない。逆臣と言うのは酷にすぎるといふ考えを、多くの史学者は持つようになってきています。